

CROSS OVER FANZINE 40

模型情報

6

MOBILE SUIT VARIATION

MSV

特集

モビルスーツバリエーション

1984

表紙イラストレーション
「MS-06R-2」 by 石橋謙一

Vol. 58

BANDAI



■スペシャル・ディオラマ

MOBILE SUIT VARIATION

ACE PILOT

ジョニー＝ライデン少佐

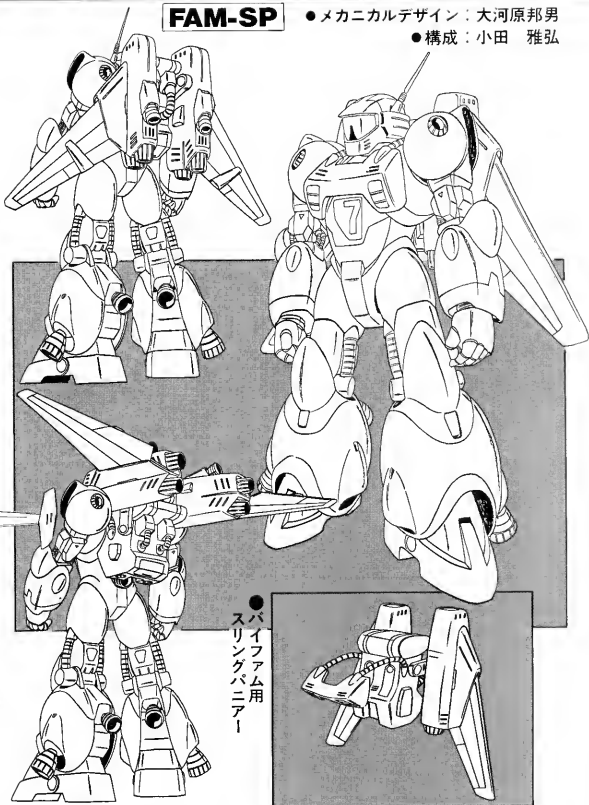


軍籍番号／PM〇五六三三〇二七九A
 所属・階級／ジオン公国突撃機動軍少佐
 この肖像画は、数多くの功績によりア・バ
 オア・クーへ召還され、少佐へ昇進したのを
 記念して描かれたものである。

FAM-SP

●メカニカルデザイン：大河原邦男

●構成：小田 雅弘



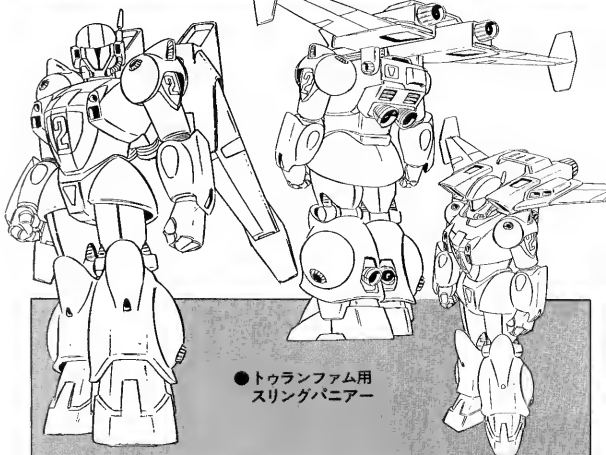
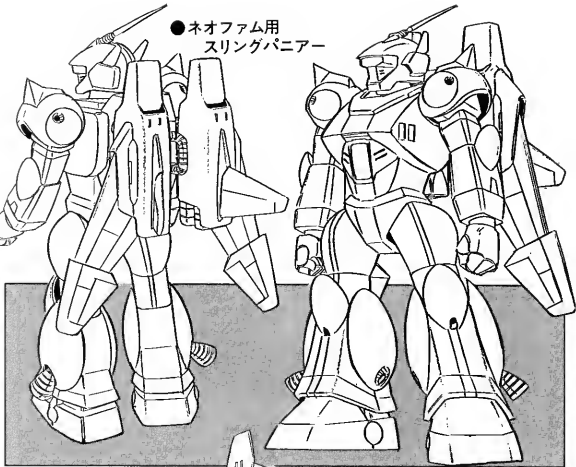
●バイファム用
スリングパニア

型式番号FAM-SPとして認識されるスリング・パニアは、RV用の飛行アタッチメントとして開発されたものでアストロゲーターからの攻撃を受けたさいARVウグ等、滑空能力を持つ兵器に広範囲に攻撃を展開され多大なる損害を受けた経験から開発された。

本体のみによる離陸は不可能で各RVのバックパック交換という形で装着が行なわれる。このオプションは大気圏内でのRVの移動半径を拡げるのと立体的な作戦展開を行うために使用されるが各RVの装着上の規格に統一化が計れる各機のパワースプリングのサーキット配置が異なるため、FAM-RV-S1、FAM-RV-L5、FAM-RV-S1 T用に個別のタイプが存在する。

スリング・パニアは通常装着の場合バックパックの位置に交換もしくは直接マウントの形で取り付けられるが、その際にはノーズを上方へ向け主翼もまた内側へ折りたたまれた状態にある。飛行時には推進ユニットを90度はね上げ可変翼を水平位置まで拡げて飛行態勢をとる。これによってRVは航続距離を約30kmまで延長することが可能となる。また、RV本体のパニアを併用すること

●ネオファム用
スリングパニアー



●トゥランファム用
スリングパニアー

- FAM-SP-1(スリングパニアー／パイファム用) 全長17.4m、主翼展開時17.4m、主翼収納時9.7m、全長7.5m(翼除く)、最高速度740km/h、航続距離320km(アフターバーナー使用時)
- FAM-SP-5(スリングパニアー／ネオファム用) 全幅18.5m、主翼収納時7.8m、全長8.9m(翼除く)、最高速度710km/h、航続距離210km
- FAM-SP-11(スリングパニアー／トゥランファム用) 全幅18.2m、主翼収納時7.6m、全長6.4m(翼除く)、最高速度715km/h(スリングパニアーエンジン使用時)、910km/h(ラウンドバーニアンのパニアー併用時)、航続距離305km

で可動性能を高めることが出来る。航空力学上の問題から動きは直線的となり最小旋回半径は約900m前後となるが本体とのコンビネーションで機動性は操縦いかによっては向上することが出来る。巡航高度は約300m。FAM-1RV-S1Tトゥランファム用のものはバックパック交換なしに直接装着が可能である。

3. RVバイファム スリング パニアー



バイファムの性能アップを目的に開発されたのがスリング・パニアー。バックハックの交換という形で装着する。キットは、バイファムとスリング・パニアーのセットです。翼は開閉自由。

★6月中旬発売予定★小売価格 ¥ 600

4. マシンナリィ・グライヤ

重戦機エルカイム 1/144



エルカイムに登場するB級ヘビーメタルだ。A級に比べパワー、安定性に欠けるが、パイロット次第で対等に戦える。各部関節可動。アンテナ可動。ビニールチューブ使用。全高120mm。

★6月中旬発売予定★小売価格 ¥ 300

1. MS-06Z ジオング テストベース

機動戦士カントム 1/144



ジオングを開発するにあたって製作されたもので06シリーズ中最も特殊な形をしている。キットは1/144スケール、各部関節可動。スライドマーク使用。メカファイル付。全高129mm。

★6月中旬発売予定★小売価格 ¥ 600

2. パーフェクトガンダム

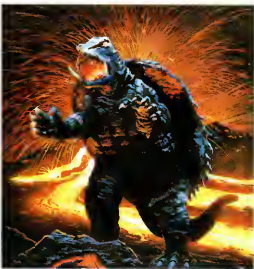
機動戦士カントム 1/144 MSV



人気漫画・プラモ狂四郎に登場したパーフェクトガンダムを再現。各部関節可動、ロケット砲、バーニア部可動。パイプは軟質樹脂使用、増加ウェポンシールド、ビームサーベル付。全高133mm。

★7月下旬発売予定★小売価格 ¥ 600

8. サ・特撮コレクション 大怪獣ガメラ



昭和40年に初公開された大映の人気怪獣ガメラは、55年までに合計8作が製作されたキットは約1/350スケール 頭、両手、両足、尾が別パーツとなっていますから、ホーズが自由につけられます また飛行ホーズも2形態が可能です 表面処理は可能な限り生物的に再現しました。F104戦闘機 かおまけについています

★6月中旬発売予定★小売価格¥700



ゲルググ少女です。

編集部より
5月号で、MS少女”をご希望
になった方にお知らせします。予想をはるかに上まる注文のため、商品の発送が遅れています。もうしばらくお待ち下さい。

5. オットバイ ホンダCBX750F

コミカルなボディに強力バックゼンマイを搭載したおもしろバイク、オットバイにホンダCBX750Fが加わりました。スウィングディスプレイがついているから、楽しく飾る事もできます。

★6月下旬発売予定★小売価格¥400



6. オットバイ ヤマハビゴラ1000

ヤマハが輸出用に開発したアメリカンタイプのビックマシン・ヤマハビゴラがおもしろデフォルメされて登場です。強力バックゼンマイで走ります。スウィングディスプレイ付き。

★6月下旬発売予定★小売価格¥400



7. オットバイ ホンダNS500

1983年のロードレースでチャンピオンマシンとなったホンダNS500が、センスよくデフォルメされて、オットバイの仲間に加わりました。強力バックゼンマイで走ります。スウィングディスプレイ付き。

★6月下旬発売予定★小売価格¥400



ジオン・モビルスーツ ザクの成立と有効性

MS-06ザクII。今時大戦で国力が連邦の三十分の一にも満たないジオン公国が、独立戦争を仕掛けるまでに踏み切る事が出来たのは、このモビルスーツの完成があればこそであった。ミノフスキー粒子の発見によるレーザーその他の電波機器の無価値化は、それまでに構築されていた電子兵器やそれを主体とした戦術を全くくつがえす物であった。

ジオン公国は、有視界戦闘における最も有効な兵器の開発に着手した。奇襲作戦それも極めて短期間の内に連邦軍の主力と対峙する事なく目的を達するしか無かった。この方針下で各重機工業、軍事メーカーに対して何らかの解答を提出させるしかなく、設計提案要請による公募がジオン国内で行なわれた。

ジオン軍部の要求したのは、重火器の使用、耐弾装甲が強く固である事、宇宙空間ないしはスペースコロニー内部での機動性に優れている事、加えて外区の占拠時に作業能力を合わせ持つ物である事等であった。この要請に対して可能性を見い出せたのは二者だけである。一方は二十世紀後半に東西陣営で競って研究の進められていたスペースビークル、もう一方は装甲強化外骨格の延長とも言えるべき、人間型作業ビークルである。両者の最も大きな違いは、前者が宇宙空間での姿勢制御に推進剤を使用するのにに対し、後者は流体バルスによって各部所の駆動モーターへ指示伝達を行ない、一定以上の速度下で「腕」や「脚」を振り、媒介物の無い宇宙空間での

姿勢制御を行なうという点であった。本来テッドウェイトとなるべき部分を全く有効な物へ転化してしまったのは後者を提示したジオニック社の才であった。

こうして新兵器案として「S・U・I・T」プロジェクト、汎用兵器モビルスーツは生まれた。型式番号MS-001の名を冠した、この奇妙にも見える兵器は作業用宇宙機という広報のもとで開発を重ね、遂には発案より五年の歳月を経てMS-005、愛称ザクIとして完成を見たのである。

MS-005ザクIをもつて教導大隊の編成が敷かれ、モビルスーツパイロットの養成は犠牲を生みながらも着実に進められた。そしてさらに整理の行なわれたMS-006ザクIIでは、完全な量産型戦闘兵器となり、ジオン軍は期の熟すのを待って連邦軍に対し宣戦布告をつけた。開戦より一週間、全く新しい攻撃体態を持つ教導機動大隊の活躍は目覚ましく、人間の使用する兵器をモビルスーツの規格まで拡大した交換兵装に（特にマシンガン型大型砲、バズーカ型ロケット砲）核装備を施し、各コロニーの制圧が行なわれた。この際に用いられた核やBC（バイオケミカル・細菌兵器）によって、密閉空間での生活を営む者は逃がれる術もなく次々に死の淵へと追いやられた。さらにはモビルスーツの持つ工作作業性をフルに活用して、占拠されたスペースコロニーに外部推進機を施設し、これを地球への降下ルートへ乗せる「フリテイツシュ作戦」俗に言うコロニー落とし作戦が行なわれた。直径六km、全長十六kmにも及ぶ金属塊が地表へ激突するという事実は、真に震撼する恐怖であったが、大規模な布陣を敷いてザクに低速作業をさせる事で、連邦軍宇宙艦隊の攻撃下での

とするのも同然で、この作戦で多くの兵力がそがれたのである。唯一制圧をまぬがれたサイド5を中心に、立て直しかなった連邦軍は史上最大の宇宙艦隊戦をここに展開した。これがルウム戦役と呼ばれる一大攻防戦である事は周知の事実である。この戦いで両軍は壊滅的な打撃をこうむり、戦局は膠着化、南極条約の調印による人類の養護項目により核、BC兵器の使用は禁止となり、本来の奇襲戦用汎用兵器ザクは活躍の場を失なった。これによって兵力の再蓄積が明確化しモビルスーツはあたかも旧2次大戦中の航空機のごとき発展経過を歩む事になる。本来汎用機として作られたザクは、大量作戦の生じ得ない時点で少数精鋭化へ進み、機体自体はより高機動化の方向をたどった。

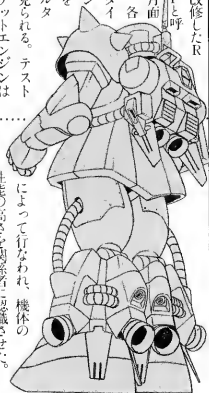
MS-006Rとして知られる機体は、こういった状況下に誕生した主力モビルスーツである。地球降下作戦による連邦軍総司令部の壊滅作戦に伴ない、宇宙空間戦での主力はMS-006A、C、Fを経てこのRタイプへとたどり着いた。

MS-006Rで提示された性能は、第一に高機動戦への対応である。メインロケットは通常のFタイプの二倍もある二一八tもある物へ換装、脚部には増速ブースターが計六基設置された。主に最大戦速での一撃離脱を目的として製作されたモビルスーツである。しかしFタイプザク以上のペイロード、機動戦性能を持ちながらも、生産率の低さと、パイロットの低質化から量産には至らなかった。何よりも、ザクのマインナーチェンジ状態で操縦に難度が表われたのと、開戦当初に多くの熟練パイロットを失なった事がこの機体に対しては不運だったのである。

MS-06C1

Fタイプ後期量産型を改修したRタイプザクの試作型はRPと呼ばれ、試作された2機は月面基地グラナダへ運ばれて、各種テストへ供された。Fタイプとの相違点は背部メインロケット、サブロケットを施設した脚部、インテグラ

ンクを大型化した腰部に見られる。テスト機に用いられた新型のロケットエンジンは1・2号機の物とも良好で、高機動飛行テスト、マニアルプレート操作時の機体保持テストには、ジオニックから出向車属として計画に参加したエリオット・レム少佐



によって行なわれ、機体の性能の高さを関係者に認識させた。

このMS-06RPでは、従来のFタイプザク以上の兵装も試され、四〇〇mmと六〇mmロケット砲が試作状態

で供された。結果的に

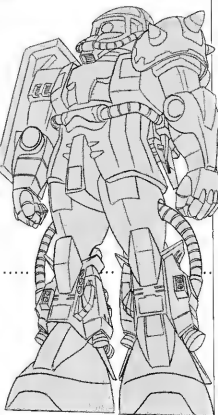
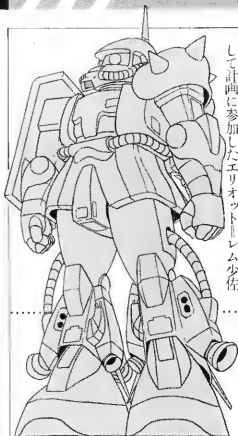
は、四〇〇mmロケット砲は生産上の問題から中途却下され、二六〇

mm砲の装弾数を増やす事で、標準兵装に承認

されている。試作機は

両機ともデイグロウオ

レンジの識別色で塗装されていた。



MS-06R-1は最初の量産型Rタイプザクである。プロトタイプの状態から生産効率を上げるための整理が行なわれ、外部施設式の伝導ケーブルやサーキットが増えたのが大きな特徴で、R

Pで腰部に集中して設けられたインテグラルタンクは脚部や、上部胴体への分化が行なわれた。

当初は量産利扱いでありながら、これに向けて開かれた生産施設は少なく、ロケットエンジンの出力増加による不良問題も相次いで起きた事も手伝って

に慣れないパイロットが続出し、本来の性能評価が得られるまでには、若干の時間を要した。R-1の正式塗装は、指揮官機を除いてグリーンのマニアルカラーが用いられている。

先行型に等しい「二機」という数に留まっている。



MS-06C1-R

Mobile Suit Variation

MS-06RP ザクⅡ

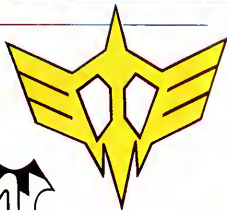


パーソナル・
エンブレム



▲シン=マツナガ大尉

▶ ジオン公国本国防空部隊
(エリック=マンズフ
ィールド中佐所属)



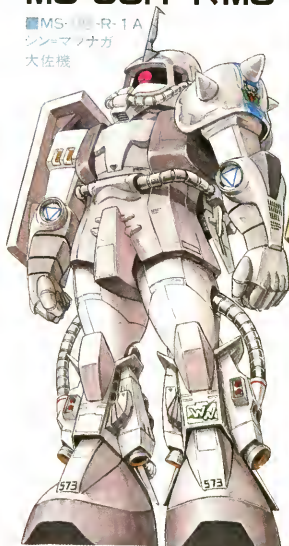
▲突撃機動軍
(黒い三連星
所属)

MS-06R-1、MS-06R-1A ザクⅡ

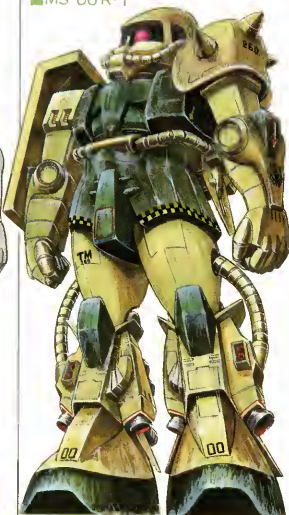
■MS-06R-1A

シン=マツナガ

大佐機

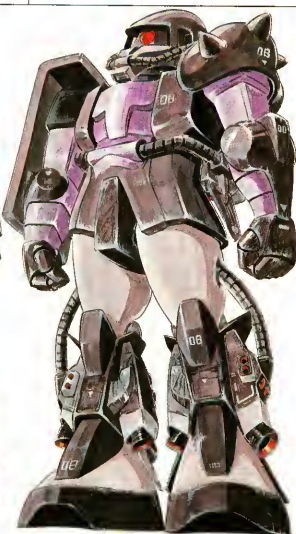
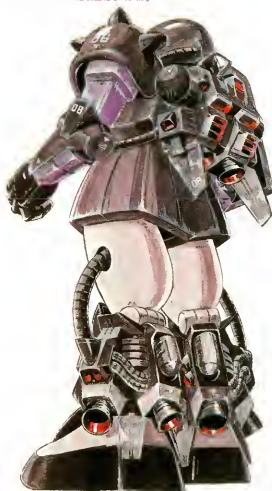


■MS-06R-1



■MS-06R-1A

黒い三連星使用機



MS-06R-1A

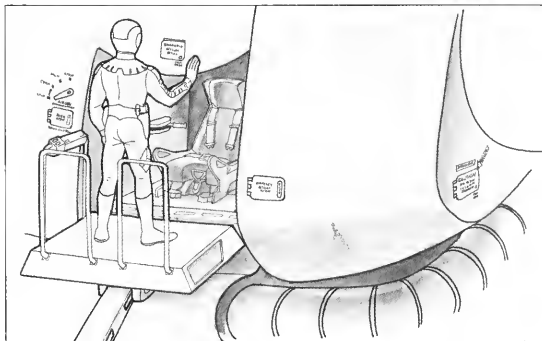
MS-06R-1Aは、前作のR-1の燃料消費配分の問題を当座解決するために、製作された機体である。R-1の燃料補給は、母艦の専用補給ベッドを介して行なわれるため、メインタンク及びサブロケットの推進剤を使い果たす前に母艦へ帰投する事が義務づけられていた。ために作戦行動時間は、パイロットの技量によって従来のFタイプ、またはそれ以下になる事が多かった。これを解決するために燃料タンクはカートリッジ化され、外見上はRP、R-1よりも複雑な表面構成の印象を持つ。特にこの改修が行なわれたために、R-1Aによる

小隊編成や、R-1Aを指揮官機とする編成の場合は、補給用にカートリッジを搭載したザクが随伴する様に指示が与えられた。

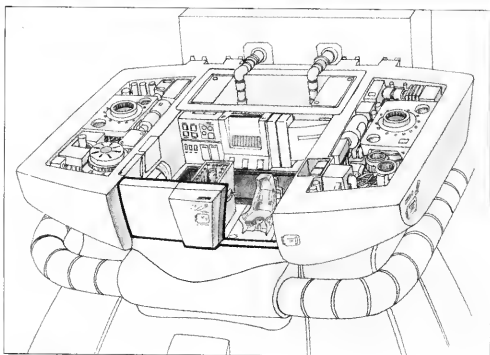
R-1Aの持つ改修点の一方には、この機体から初めて設けられた、脱出システムがある。ザクは共通して右胸部にコ

クピットを持つが、シートのあるスライドデツキ部がこのR-1Aでは、緊急の際には、そのまま前方に射出が可能で、それ自体にある程度までの推進機能、太陽電池、生命維持用の装置類が搭載されている。R-1Aは、R-1の実戦テスト中に設計改修して生まれたタイプで、生産デッキ上のR-1も途中から十一機はこのR-1A仕様へ変えられた。特にRタイプザクとして、指す場合はこのR-1Aが多く、各指揮官、エースパイロットの申請による受注調整で引き渡された。

■コクピット外部



MS-06R-1Aの内部構造

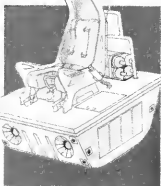
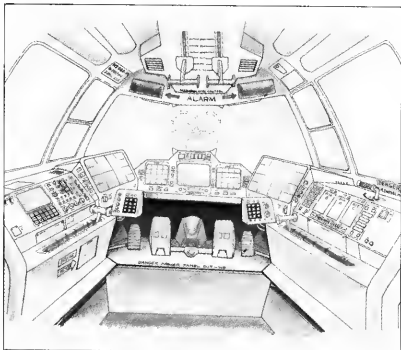


■内部構造

Rタイプの内部構造は、Fタイプのものとは比べ大幅に改良が加えられている。特徴としては、それまでコクピット後方にまで占めていた補機類が整理され、コクピット左右の機械室に収容されている。これにより、機械室に設けられていたインテグラルタンクを、コクピット後方にまとめることができた。上半身の駆動装置自体もFタイプよりコンパクト化されたこともあり、燃料搭載量は機内タンクだけで10%以上増やすことができた。コクピット下部には、主機室(反応炉室)とコンピュータユニットが設置されている。レイアウト的にはFタイプのもとは変化はないが、性能は大幅に向上している。もっとも、サク自体の形状から起因する限界から、これ以後の性能向上は多少は見込めても、FタイプからRタイプへと変ったような大幅な性能向上は無理と思われる。

次にコクピット内部のレイアウトは根本的に、新設計のものになっている。Fタイプのような、コンソール中央のコントロールスティックは廃止され、変りにサイドコンソールにそって二本のコントロールスティックが取り付けられている。また、マニュアルコントロール用のスイッチが多数設置されているので、微妙な機体のコントロールが可能になったかわりに、繰繰テクニクは高度なものが要求される機体でもある。このようにRタイプは単なるFタイプやSタイプの改良によって生れたタイプではなく、外観こそMS-06だが内部構造はまったくの別機といってもよい機種である。

■コクピット内部



■パイロットシート

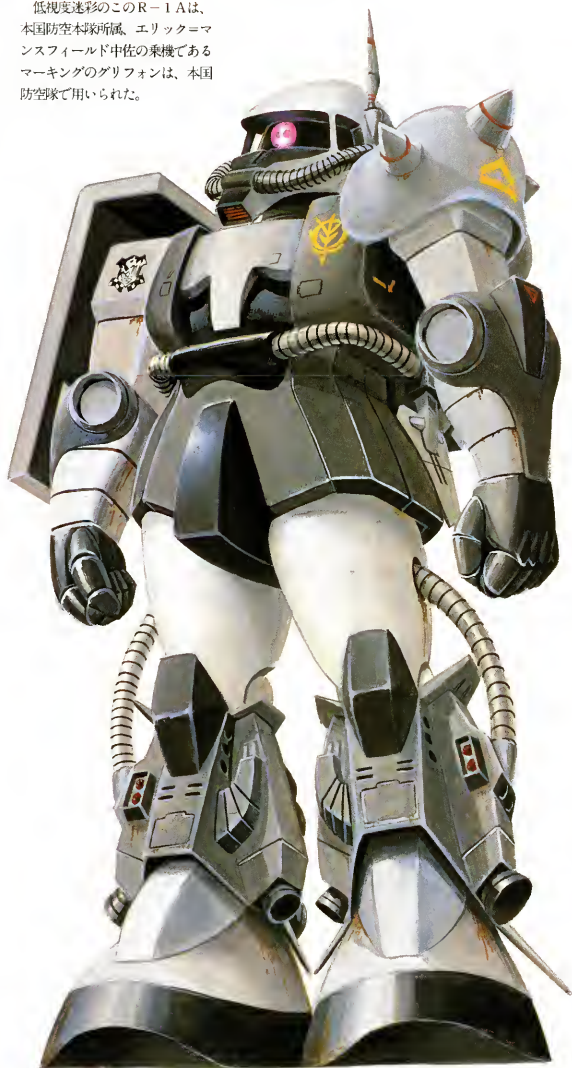
MS-06R-1A ザクⅡ

ア・バオア・クー要塞基地に駐屯したEフィールド防空大隊所属のマサヤミナカガワ中尉のMS-06R-1A。茶系を主体とする個人カラーは、戦後の格納庫内での写真で、地上用迷彩色と誤認されたが、後に脚部の一緒に写っている物も発見され、Rタイプである事が確認された機体である。



MS-06R-1A ザクⅡ

低視度迷彩のこのR-1Aは、
本国防空本隊所属、エリック＝マ
ンスフィールド中佐の乗機である
マーキングのグリフォンは、本国
防空隊で用いられた。



Mobile Suit Variation

MS-06R-2P ザクII

ビーム兵器をモビルスーツに標準装備化させるのが提案されたのは、大戦も末期に近づいての事である。殊にMS-06を生んだジオニク社は、この新型兵器をMS-11の名で設計を進めていた。しかし局地戦用モビルスーツMS-09ドムの高性能に気を良くしたジオ軍部は、これの推進エンジンを宇宙用に換装する事で、ザクに変わる主力宇宙用モビルスーツ部隊

の編成を計画した。多大なる

開発費を投じていたジオニクは社内

秘でMS-11用ジェネレ

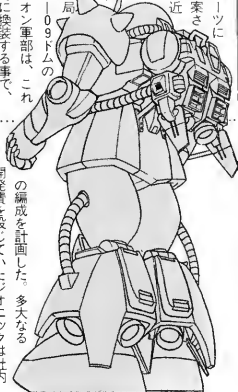
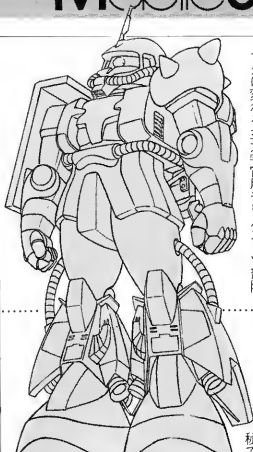
ーターを装備したMS-06R-1Aを

持つてこの競争へ参加した。これがMS-06R-2Pで

ある。機体のキャパシティでは冷却効率

上の問題を残し、低出力ビームの発射可

能まで再び設計は変更された。



MS-09と競作されたMS-06R-2はR-2Pで

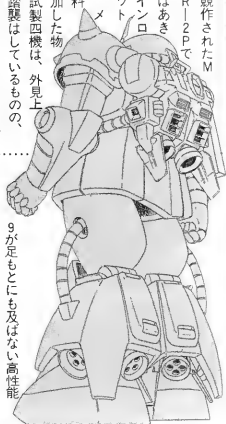
ビーム砲装備化はあきらめたものの、メインロケットとサブロケット

の再度出力増強と、メインタンク等の燃料

搭載量を大幅に増加した物として完成した。試製四機は、外見上

ザクのフォルムは踏襲はしているものの、装甲材は高質の物へ変えられ、脚部には外

側のみ、増加装甲が設けられた。耐弾性もはるかに向上し、機動性ではMS-09



9が足もとにも及ばない高性能を示したが、コスト面、生産性に難を発見

されるや、軍部はこの機体を却下した。しかしジオ

ニク社の早足はすぐ後のMS-14

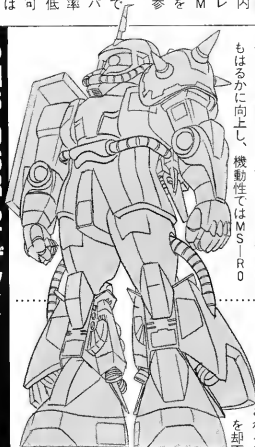
で昇華された。

社内に残された

一機はその後MS-14と同次元で

研究用の母体となり、MS-06R

-13ザクIIIの名称で呼ばれた。



MS-06R-2P ザクII

スペシャルデioramaの製作

模型製作・情景写真 / 千草 巽

今回のデioramaは、MS-06EとMS-07Hのアクションシーンをテーマに取り上げてみた。特にアクションシーンは、普通の作り方では満足のいく仕上がりにならない場合が多いので、合成写真の技術を応用して制作してみた。製作方法は、基本となるプラモを作り、プラン通り配置して一回目の撮影をし、プリントをします。次に、プリントに

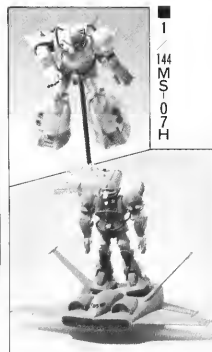
背景を書き込みます。完成した背景の前にプラモを置いて再度撮影、プリントし、煙やジェット噴射などを、書き込みます。作例の「飛翔」が、この方法で作ってあります。この方法での製作方法ですと、作例「樹海」のように、ベース製作が不可能に近いものや同じプラモを多数使用するデioramaには、かなり便利なテクニクです。



■デiorama製作・写真 高瀬ゆうじ



■1/144MS-06Eとオマケキットのフライマンタ



■1/144ドダイYSと1/144MS-07B

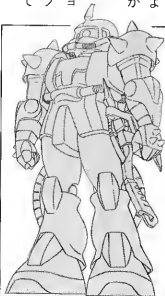
ジオン軍モビルスーツ 開発の流れ

ジオン軍のモビルスーツ開発は、「S・U・I・T」プロジェクトに着手してから五年目にして、初の実戦型であるMS-05Aザクが完成した。この間は模索と苦闘の時代といえるだろう。MS-05は、さらに改良が続けられ、完全戦闘型MS-06ザクIIが誕生した。その中の三番目のモデル、Fタイプでは、それまでのモビルスーツ開発の経験と技術の総決算だったといえる。

Fタイプの完成はジオン軍にとって、プロジェクト全体の開眼といえる。そして同タイプを原点として、次々とMS-06のバリエーションが誕生した。平時であるならば、より完成されたモデルへと開発が進むはずだが戦局の悪化は開発の方向を変えてしまった。ジオン軍部は日々変化する戦局に対応するため、Fタイプを起点とするバリエーション開発に固執してしまい、真に必要なタイプのモビルスーツの開発、実戦投入を遅らせてしまうという結果を招いた。

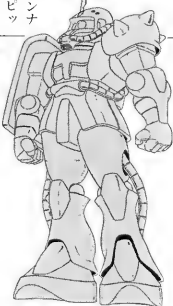
MS-09F ドズル・ザビ中将機

宇宙攻撃軍総司令ドズル・ザビ中将の乗機は、MS-06FザクIIをベースとしたカスタムタイプである。基本的にはFタイプと変わらないが、徹底的なチューンナップとドズル中将の体格に合わせてコクピット容積の拡大、並びに両肩のアーマーを四本スパイク付きアーマーに変更されている。同時に武装として、特製の大型ヒートホークも製作されている。一般にこのような高官の乗機は、ステータスシンボルとして存在するのだが、ドズル中将の場合はルウム戦役のとき自らこのモビルスーツに乗り、戦場視察の名目で二個戦隊のモビルスーツを引き連れ実戦参加している。



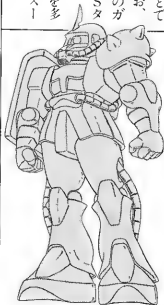
MS-09MS ガルマ・ザビ大佐機

Fタイプは、Fタイプに40ミリマシンガン1門を搭載したタイプで、Fタイプの生産ラインから、定の割合いで生産されたといわれている。このタイプの機体はSタイプが登場するまでの間、部隊指揮官とか接近戦を主任務とする部隊に配備されたが、搭載されたマシンガンの効果のほどは期待されたほどではなく、あまり記録に残っていない。なお、高官の使用例としては、地球攻撃軍司令のガルマ・ザビ大佐が、チューンナップしたFタイプを持っていた。だが、ガルマ大佐自身は、ガウ攻撃母やドップ制空戦闘機を多用していたこともあり、個人専用モビルスーツがあったことはあまり知られていない。



MS-09S シャア・アズナブル少佐機

Sタイプは、練度の高いパイロットの要請によって開発されたもので、Fタイプをベースにしたパワーアップモデルである。別名指揮官用ザクと呼ばれるのは、Sタイプが主に部隊指揮官用に配備されたことからきている。Sタイプの特長は、Fタイプより30%も出力の高い、二重クラスの推進エンジンによって、Fタイプの3倍の機動力を記録した例もあった。このSタイプを愛機としたエースパイロットには、赤い特長として知られるシャア・アズナブル少佐がいる。彼がマークした戦果の大部分は、このSタイプを乗機とした時期に記録されている。



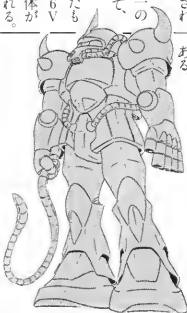
MS-06W 作業用ザク



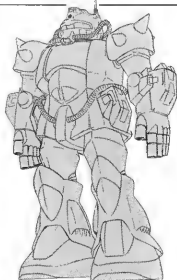
このタイプのザクは、ジオン軍型式番号記録に分類されていない型式である。とは言っても、前線将兵は一般にWタイプと呼んでいた。戦後の記録から確認する限りでは、大戦中期にアジア西部付近でこの作業用ザクを見ることができ、特徴としては、背部ランドセルを削除し、段式荷物デッキが新設されている。また、腕部に大型スコップやウインチも装備されていた。だが、全く同一の外形を持つ機体が発見されなかったことで、おそらく地上での運動性能が思わしくなかった機体や、能力不全の機体を流用したのも思われている。流れるにはMS-06Vにつながるタイプであるが、かなりの機体が再武装され、戦闘に参加したものと思われる。

YMS-07B ランバール大尉機

ジオン軍は地球進攻に当たって、MS-06より白兵戦性能を強化した新型モビルスーツ、MS-07ザクを完成させた。Aタイプは、機体の生産が先行したことから固定武装を持たないタイプとして生産されたが、このBタイプでは当初の計画通りに、左腕に五連装75ミリマシンガンと右腕にヒートロッドを装備した。生産はそれまでのMS-06Jの生産ラインを流用し、量産先行型のYMS-07Bをへて、完全量産型のBタイプが生産された。同機の使用例としては、量産先行型ではあるが、連邦軍新鋭艦ホワイトベースの追撃隊長のランバール上級大尉の機体がある。



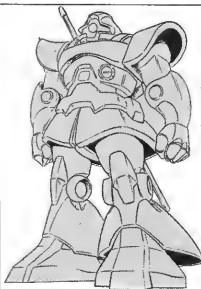
MS-07C-3 グフ重装型



地球進攻が進むにつれて、戦局は多様化しそれまでの主力モビルスーツMS-06Jでは、状況に対応しきれなくなった。そこで登場したのが、グフのCタイプシリーズである。このタイプは部分的なマイナーチェンジが次々とおこなわれたことで、より一層局地戦用モビルスーツの色合いが濃くなった。その中で、C-3タイプと呼ばれる機種は、重装甲重武装で知られている。特徴としては、右腕のヒートロッドが廃止され、両腕に85ミリ五連装マシンガンと頭部に30ミリマシンガン、両腰には予備マガジンがそれぞれ装備されていた。

MS-09ドム 黒い三連星使用機

地上でのモビルスーツの移動力の低さを解決すべく開発されたMS-09は、熱核ジェットエンジンとロケットの複合推進機を装備している。また、それまでのモビルスーツ以上の重装甲と、新開発の360ミリジャイアントバズとの組み合わせで、重モビルスーツの名をほしいままにした。このタイプの量産機を初めて配備された部隊は、黒い三連星。知られる突撃機動軍第七師団の特務小隊であった。彼らの得意戦法である、ジェットストリームアタックは、MS-09をして初めて地上でも可能となった。後にオデッサ作戦で、彼らとRX-78の対決は広く知られている。



MS-06Fカスタム、MS-06FS、MS-06W

■MS-06FS

ガルマ=ザビ

大佐機



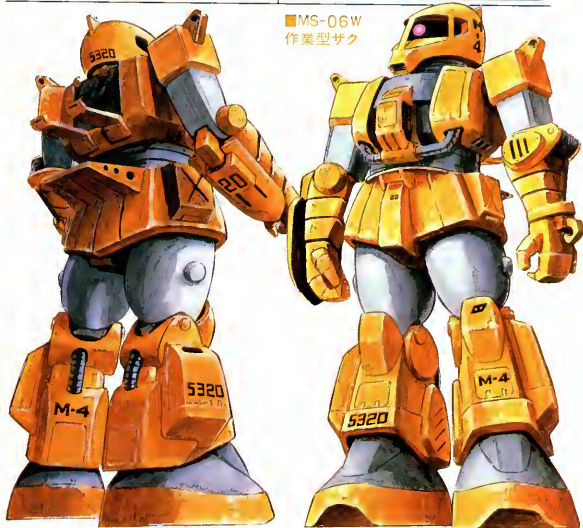
■MS-06F カスタム

ドズル=ザビ中将機



■MS-06W

作業型ザク



MS-06S、MS-07C-3、YMS-07B、MS-09

■MS-07C-3

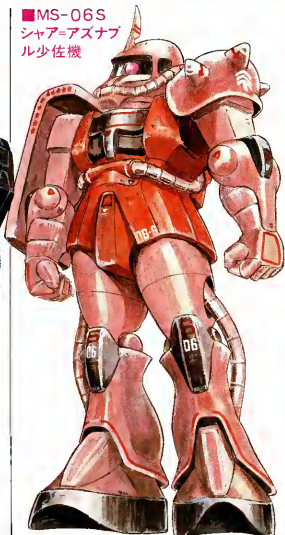
クフ重装型



■MS-06S

シャア=アズナブ

ル少佐機



■YMS-07B

ランバ=ラル

大尉機



■MS-09

黒い三連星使用機



ホワイトベース級 宇宙攻撃空母

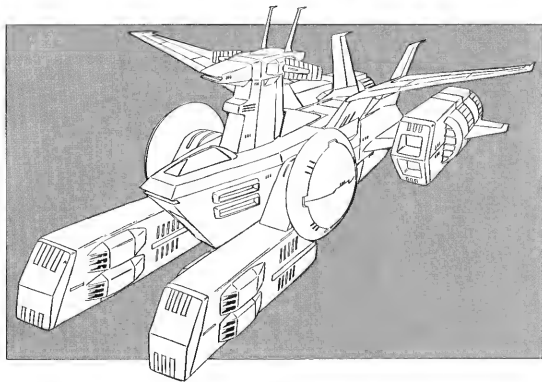
連邦軍の最新鋭艦で、V作戦の一翼をになっているのが、ホワイトベース級宇宙攻撃空母である。もともと連邦軍の宇宙空母建造計画は、かなり古くから議論されながらも正規空母は、本級が建造されるまで実施されることはなかった。以前にも連邦軍はトラファルガ級の宇宙空母を建造したことはあるが、これはマゼラン級宇宙戦艦の艦体を流用して両舷に開放型の全通フライトデッキを取り付けたものである。艦載機数は、トマホーク型空間戦闘機十二機あるいは、バブリク級宇宙艦六隻であった。格納庫は持つておらず、艦載機運用能力はかなり制限されていた。トラファルガ級は合計八隻建造されたが、正規空母には分類されずに全通甲板型支援巡洋艦とされていた。このほかにも改コロンブス級（アンティータム級）補助空母二十四隻が、戦時中に建造されている。つまり、ホワイトベース級は連邦軍にとって、正規空母として計画され建造された初めての艦といえる。

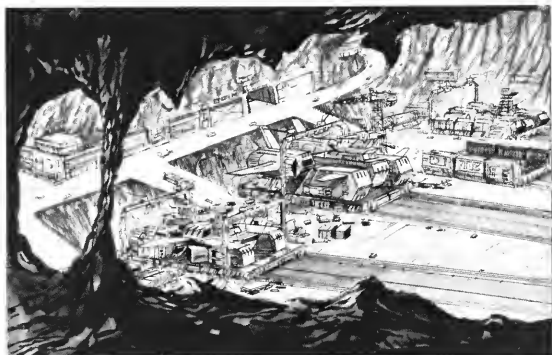
計画立案当時は、SCV-Xのコードネームで呼ばれていた。もちろん艦種は宇宙空母であった。幾度かの設計変更のすえ、SCV-27計画として連邦議会の承認をえて、細部設計の段階へと入っていった。戦後公表された資料によると、大艦巨砲主義に固まっていた議会を説得するために、一時艦種を艦載機を多数搭載した戦艦としていたのが面白い。この

段階で予定されていた艦載機は、ハービック社製のFF-S3セイバーフィッシュ十二機であった。

ホワイトベース級が実際に建造開始されたのは、開戦前年で三隻同時にジャブローのAブロック船台であった。だが、間もなく起った今次大戦で、ホワイトベース級は大きく変わっていった。ジオン軍が使用したモビルスーツに対抗するべく開発が開始されたRXモビルスーツ（正確にはRX-77、78）の母艦として、再度設計変更が加えられたのである。そしてSCV-27計画はV作戦に統合され、以後最高軍事機密のなかで建造が進められた。艦種もRXモビルスーツ用強襲揚陸艦へと変更された。もともと艦種分類は、一番艦が就役するさいに、正式に宇宙攻撃空母となっている。たび重なる艦種変更により、人によって本級が戦艦とか強襲揚陸艦と呼ぶのはこのためである。計画順では一番艦にベガス（SCV-69）ホワイトベース（SCV-70）の順で完成するはずであったが、実際にはホワイトベースの方が早く完成し就役したので古来の慣習により、本級のネームシップとなった。三隻目は一番艦の武連にあやかり、ホワイトベースJr.として完成したが、終戦時に一番艦ホワイトベースが戦没したので、救出された乗員によりホワイトベース二世として就役している。

四番艦からはフライトデッキ、ハンガーデッキを大巾に拡大し、より多くの艦載機が運用できるように設計変更がされている。外観上、かなり変化しているのに人によっては、改ホワイトベース級とか四番艦名からサラブレッド級とも呼んでいるが、連邦軍宇宙艦艇年鑑では、特に新しいタイプへ分類されていないので、四番艦以後を強いていうならば準ホウ





イトベース級と呼ぶのが正しいだろう。理由としては、三隻計画された艦はどれも同型ではなく、三者三様の外観と運用方法をしていたことがあげられる。なお共通している点は、一―三番艦の特徴であった主砲とビーム砲を廃し近接防衛兵器のみとしたことと、空間戦闘機十二機とR Xモビルスーツ十八機を標準搭載機数としていたことがあげられる。

この準ホワイトベース級は開戦直後に相次いでジャブローで起工されたが、実際に竣工したのは一番艦サラブレッド（SCVA-72）と二番艦トロイホース（SCVA-73）の二隻でしかなかった。三番艦（SCVA-74・艦名未定）は、ホワイトベース（SCV-70）の復旧作業用に転用されたため、工程37%で建造は中止され解体されている。

準同型艦二隻を含むホワイトベース級五隻のうち、戦時中に艦隊配備されたのはホワイトベース、ペガサス、サラブレッドの三隻で、ホワイトベースJr.とトロイホースは終戦時には慣熟訓練中であつた。唯一戦果を上げたホワイトベースの艦歴は、前例のない特異なものであつたと記録されている。同艦は宇宙世紀79年九月七日にジャブローで竣工し、公試と慣熟訓練をかねてルナII方面に出撃している。途中、R Xモビルスーツを受領するために寄港したサイド7で、シャア少佐（当時）の部隊の攻撃を受けた。かろうじて勝つたものの、正規の乗員の大部分を失い、民間人の手でルナIIへ回航されている。その時の手際は、ベテラン乗員もかくやというほどの運用ぶりだったらしい。当時、V作戦の最高司令官であつたレビル將軍は、戦時特例法を楯にして同艦に乗り合わせた民間人のうち、主だった者をホワイトベース勤務を命じた。

後にニュータイプとしての素養が認められたことで、実戦部隊としての任務のほかに、新兵器の試験部隊としての任務も命じられている。地球降下後は、各地を転戦しオデッサ作戦を最後に、ジャブローに帰港。一ヶ月半のドック入りの後、星一号、チェンバロの両作戦に参加している。チェンバロ作戦では、ア・バオア・クーへの血路を開いたものの集中砲火を受け大破着底してしまつた。乗員はほぼ全員救出されている同艦の戦果は確認されただけで、艦艇十一隻撃没あるいは大破、モビルスーツ等一二〇機以上撃墜をマークしている。この中には地球攻撃軍司令ガルマ、ザビ大佐のガウ攻撃空母や宇宙攻撃軍司令ドズル、ザビ中将のビッグ・ザムも含まれている。この記録は今次大戦で単独艦の戦果としては最高である。なお、ホワイトベース級の主要目は次の通りである。全長二百五十メートル、全幅百九十メートル、基準重量六万八千トン、エンジン推力（巡航時）三万八千トン二基、武装五十八センチ連装砲一基、連装メガ粒子砲二基、連装機関砲座十八基、ミサイルランチャー三十二門、艦載機は、R Xモビルスーツ六機、戦闘機等十機。乗員数（定員）二百二十五名。

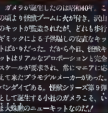
『模範書』6月号・特別編集／モビルスーツバリエーションハンドブック第四集

構成／小田雅弘・石川秀一 レイアウト／藤森尚隆
イラスト／大河原邦男・増尾隆幸・石橋謙一・上田 信・
米田仁志 模範製作・情景写真／千草 巽・高瀬ゆうじ
協力／講談社・日本サンライズ

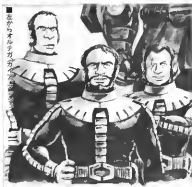
©模範通エージェンシー・模範日本サンライズ・毎日放送・

大映

ガメラ



Rタイプのエースパイロット



黒い三連星

「黒い三連星」と呼ばれるのは、本人名義を突撃機隊第7001番隊1モビルスーツ大隊に全部付き特務小隊として、編成は突撃機隊に、部隊編成の特別特務小隊といわれているが定かではない。戦後に設立された初めての部隊は、コロニー別自衛隊にA・ガイア平野を

る。このヘルム戦役では、MS-06Cを乗機とし、ジュウストライムアタックをもって連発中のレベライ特有を破壊している。その後、ホタイプ、Rタイプと乗機を変えながら、戦果をあげていく。オデッサ作戦終了、MS-06C部隊と接触し待ち待たせるが今減している。

エリオット＝
レム
中佐

エリオット＝レムはエースパイロットではないが、モビルスーツ開発における設計者兼テストパイロットとして、後のエースパイロットと並び高く評価されている。元々は山田重太郎（サイド1）でいられたが、後にジョーンに招かれ、ZION1社に入社し「S-U-1-F」プロジェクトに参加する。この時、中野直樹の厚遇となり、突撃機マニュアルを作成している。彼の乗機は、MS-06からMS-06Fの1機を改造し、Rタイプの追加設計者としてそれぞれのモビルスーツを完成させている。

ジョニー＝
ライデン
少佐

「山田重太郎が、影オーストラリア人外からサイド3へ移した。第1次戦役の副司令として与えられる。元祖はアメリカ人外から、オーストラリア人外へ移している。ライデン自身、ゾンは珍しいアメリカ人の血を持っている。22歳のとき中へ志願し、1週間かけてはMS-06Cのパイロットとして着任し、その戦い戦機1隻目を撃沈の功績により、表彰を受ける。この時の乗機は、MS-06Fに改装した機で乗った。少佐、見逃し、乗機をR-2タイプとし多人戦果を上げている。その後、エース部隊へ転属し、MS-06B、Cを乗機としている。

シン＝
マツナガ
大尉

「ノロメンの1機」として有名になったマツナガは、「山田重太郎にマツナガ家の長男として生まれた。訓練所前へ来に入隊し、1週間前、参加している。訓練所からの戦果が、特異に、訓練所へ入隊する上での功績に貢献する。早くから成るパイロットとしての才能を認められ、その功績は、カラム戦役の功績戦功の功績戦功に署名したという。彼のシンボルでもあるホワイト中隊のモビルスーツは、この頃のMS-06Fからだとはいわれている。なお、ゾモンが戦役では、本隊イデオに所属していたので戦線には参加していないが、乗機は脱走している。



■コバートキリアム大佐機



MS-06R-2 ザクⅡ

■ニューライテンツ少佐機



わがこ機は製作に終わりながら、MS-06R-2の機体本来の性能は非常に高い物であった。ゆえにMS-06R-1A以来、強敵パイロットのRタイプを乗機とするもの上中は数多く、このR-2も部下扱いとなるや、社内同機を残して中隊中のパイロットに選された。中でもジュニーライテンツ少佐の真紅の機体は有名だが、残った2機は、ロバート・ギリアム大佐、ギンバール・バザード中佐の手へゆけられた。特出した両機の正式な記号はあまり見えないが、ダラダラ集団への戦力生動の際に、これら2機ともが部隊編成に見られる事から、ア・バキア・ターゲット戦へ参加してであろう事は推測される。



■ギンバール・バザード中佐機

樹／海

眼下に広がる一面の樹林。はるか上空を飛ぶ連行任務のMS-06Bの目標は、連年最大の拠点であるジャブロー。随所するBタイプから撮影された偵察機は、ブースターを全開にして目標に迫っていく。



飛／翔

機は試験が終了したMS-07Hではあったが、ドタイプ変種が不成品だった時点で、再設計機試験がこなされた。アリゾナ砂漠での実用試験は、相互試験のやり方でこなされ、全てのデータは地上車両のスタッフの手で記録された。